

全職員が安全衛生活動を経験し その必要性を実感することが力ギ

広島県呉市——瀬戸内海に面し、古くから天然の良港として知られてきた同市は、造船や鉄鋼などを中心とした臨海工業都市として発展してきた。市職員は約1700人。多くの地方公共団体同様、ここ何年かは行政改革の環境で職員定数の適正化が図られ、職員数は減少傾向にある。またメンタルヘルス対策や過重労働対策が安全衛生の重点課題になっている点なども、多くの団体と共通した状況だ。

だが、呉市の安全衛生活動には注目すべき点がある。それは近年、安全衛生活動が徐々に活発化している点である。それは現業職場に限らず、ともすれば安全衛生活動の影が薄くなりがちな事務職場においても同様だという。

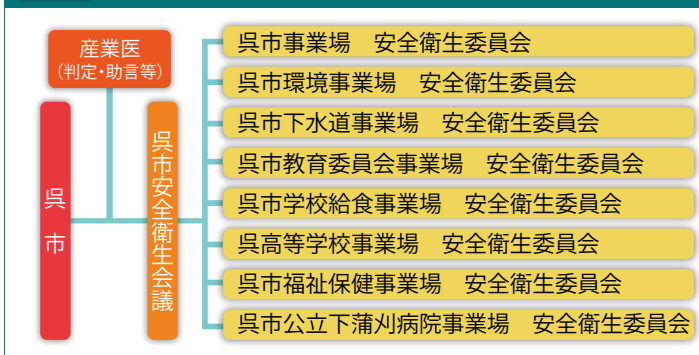
呉市の安全衛生活動が活発化した背景には何があるのだろうか。それを知ることは、「効果的な安全衛生の人材育成とは何か」のポイントになるはずだ。

呉市の安全衛生管理体制は2階層になっている(図1)。水道局・消防局以外の職員は「呉市職員安全衛生管理規則」のもと、事業場ごとに8つの安全衛生委員会に分かれているが、さらにその上に「呉市安全衛生会議」という機関をおいているのだ。

安全衛生会議は、各安全衛生委員会から総括安全衛生管理者1人と職員代表1人の計2人が参加。年に2回開催される会議の場では、市全体の安全衛生活動の方針や、年間計画、予算関係、そして各委員会共通の懸案事項などが話し合われる。そこで決まった事項を、安全衛生会議委員が各委員会に持ち帰り、具体的な行動計画を各委員会で決めて実行するという仕組みだ。ちなみに安全衛生会議のメンバーである総括安全衛生管理者には各部の部長職にある職員が指名されるが、もう一人の職員代表は各職場の推薦で決まる。任期は2年だ。経験者が再選されるケースもあるが、ずっと同じ職員ばかりということもなく、若い職員が選ばれることも珍しくないという。

安全衛生会議の事務局であり、市の安全衛生全体をまとめる総務企画

図1 呉市安全衛生管理体制



部主幹・榎谷博孝さんは「安全衛生会議は市の安全衛生活動の大きな流れや方針を決める場であって、活動の詳細については各委員会に任せています。職場ごとに環境が違い、安全衛生に求められていることが違いますから。ただ、把握しておくという意味で、各委員会が決めた具体的な活動内容は、会議に報告してもらっています」と語る。

実は呉市では、安全衛生委員会の活動が平成17、18年度ごろから少しずつ活発になってきている。図2は各委員会の年間開催回数だが、各委員会でもバラつきがあるものの、全体として開催回数が増加傾向にあるこ



(左から) 総務企画部主幹・榎谷博孝さん、保健師・青木直子さん、保健師・須山美保子さん

とが分かる。会議の開催回数や開催時期は各委員会任せで、安全衛生会議や総務企画部が「もっと開催しなさい」と指導したわけではない。榎谷さん曰く「突然回数が増えたというわけではなく、徐々に、ごく自然に各委員会が開催されるようになってきた」とのこと。なぜなのかその理由を聞いてみても、総務企画部の面々も首を傾げる。そのころに何か大きな公務災害が起きたわけでもないというし、何か新しい安全衛生の研修を始めたというわけでもないという。保健師の青木直子さんは「これは推測ですがありませんが、委員会の開

図2 各事業場における安全衛生委員会開催回数

事業場名	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
呉市事業場	4	7	9	10	12	12	12	12
福祉保健事業場	1	2	3	8	9	8	10	11
環境事業場	11	10	11	11	12	12	12	12
下水道事業場	3	2	6	10	10	10	10	10
教育委員会事業場	4	7	10	10	9	12	12	12
学校給食事業場	2	4	7	10	7	6	7	7
呉高等学校事業場		1	2	3	4	4	4	4

催が増えてきた時期は、ちょうど職場の安全衛生の問題点が多様化してきた時期と重なります。例えばメンタルヘルスや特定健診、過重労働の問題など、職場の安全衛生活動に求められるものが多様化してきて、自然に職場の安全衛生の意識が高まったのではないのでしょうか」と語る。なるほどそれは確かだが、共通の問題を抱える地方公共団体全てが安全衛生活動の活発化を図れているわけではない。問題が浮上してきたときに自然に活動を活発化できるのは、やはり基本的な職員の安全衛生意識

の高さがあるからこそだと思ふ。なぜ呉市の職員は、安全衛生意識が高いのだろうか。なぜ自然に安全衛生活動を推進することができていくのか。それを考えつつ、呉市の日々の安全衛生活動について聞いていくと、一つの答えが見えてきた。それは、呉市では全職員がごく当たり前に、普段から安全衛生活動に参加しているという事実である。

「災害検討会」 職場の全員が参加する

呉市の日々の安全衛生活動のなかで、まず注目したいのが「災害検討会」だ。これは、公務災害や通勤災害が起きてしまったとき、被災した職員が所属する職場で「なぜ災害が起きたのか」「どのような状況だったのか」「災害発生後、どのような対応をしたか」「同じような災害を防ぐために、どのような対策をすべきなのか」ということを話し合う会だ。基本的には所属の職員全員が参加する。榎谷さんは「事故が起きたとき、その当事者だけで終わらせてしまうのではなく、同僚全員が話をよく聞き、一緒に事故について考えることが大切だと私たちは考えています」と言う。確かに、災害事例を知ることとは防止策の最も基本的なことの一つであり、それが身近な人を見舞われた災害ならば、より親身に、自分

のこのように考えられるものだろう。不謹慎かもしれないが、これ以上の安全教育教材はない。「現業職場ではどうしても事故が起こりやすいため、現業職のほぼ全員が一度は災害検討会を経験していると思えます。事務職場は災害件数が少ないため全職員が経験しているわけではないかもしれませんが、それでも多くの職員が検討会を通じて公務災害・通勤災害対策をすることの重要性を実感していると思えます」と榎谷さんは語る。「災害検討会で話し合われた内容は、災害検討会実施報告書（図3）にまとめ、安全衛生委員会に提出。その後、所属の課長自らが委員会に出席し、課の職員全員の代弁者として、

災害の発生状況や原因、そして災害防止策をどのように考えているのかを詳しく説明することが義務付けられている。榎谷さんは「防止策が不十分だと思われられる場合には、委員から厳しい意見が飛ぶこともあり、課長は中間管理職として大変な責務を負っていると思えます。ですが、それも全て職員を守りたいという意識からきていること。職場と安全衛生委員会と一緒に職員を守っていくための決まりなので、予算等のバックアップが必要なきにはその相談にものります」と語る。「災害検討会」は、いつから始まったのか記録がないほど以前から継続して行われてきた。呉市の職員にとっては、公務災

図3 災害検討会実施報告書（例）

平成24年●月●日

人事課長殿 ○○センター長

公務
通勤

災害検討会実施報告書

実施年月日・時間	平成24年8月6日8時15分～8時30分	
場所	○○センター	
出席職員（部・課・係名等）	参加人数	
センター長、副センター長、係長、専門員、主事（7名）	11人	
検討課題	災害発生年月日	
公務災害再発防止について	平成24年8月3日	
1.災害発生の原因分析		
8月3日、市道中学校沖幹線維持管理のため、○○町西○○丁目の森公園沖の側溝排水路の調査をしていた。排水路の出口が海に排出されているため、吐出口を確認するため、高さ1.6メートルの護岸に上がり排水路の出口を確認する必要があった。		
確認後、護岸から降りようとしたところ、バランスを崩して転落したため、左踵骨折・左足関節捻挫した。		
原因としては、①護岸が1.6メートルの高い場所だった、②幅が50センチと狭く、足元が見えにくかった、ことが考えられる。		
2.災害発生後の対応		
災害発生直後から、左足に痛みがあり、歩行困難で患部に腫れも確認されたため、センターに連絡するとともに、すぐに○○○病院に受診した。		
3.今後の安全対策		
①高い場所での作業では、できるだけはしご等を利用し、安全確保できるようにする。		
②高い場所・狭い場所など見通しの悪い場所は特に注意して、作業の安全を図ること。		
③危険な場所を確認する必要がある時は、必要に応じて応援職員を呼び、適正な人数で協力しながら作業すること。		

図4 職場巡視前 自己点検報告書

平成24年度 第1回 職場巡視前自己点検報告書（事務室用）

巡視場所
巡視者
巡視日 平成 年 月 日

点検項目	評価	備考
1 通路の確保		
(1) 十分通れる通路の幅は確保されているか（最低60cm）		
2 床面等の障害物		
(1) ゴミ箱等の置き場所はよいか		
(2) 書類等が床面におかれていないか		
3 備品等の破損		
(1) 机・椅子等に破損はないか		
(2) 身体に引っかかるものはないか		
4 落下危険物		
(1) ロッカー等の上に落下しそうなものはないか		
(2) ロッカー等を重ねて設置しているか		
(3) ロッカーの扉はいつも閉まっているか		
5 電気等の配線		
(1) たこ足配線はないか		
(2) コードを踏んだり、傷つけたりしていないか		
(3) 延長コードのコンセントは机の上に出ているか		
6 窓扉等の破損		
(1) 開閉に支障またはキケンはないか		
7 整理整頓・清掃・清潔		
(1) カウンターが整理されているか		
(2) 不要な物は処分されているか		
8 緊急避難口		
(1) 非常口は確保されているか		
(2) 非常口の場所を職員が知っているか		
(3) 非常口に物が積まれているか		
9 良い姿勢が保てる足位置の空間確保		
(1) 机の上は整理されているか		
(2) 足下に荷物がいないか		
その他（重要事項）		

評価 ○（良好）、△（検討を要する）、×（改善を要する）

害・通勤災害対策は安全衛生委員だけがやることではなく、職員一人ひとりが考え、委員会と共に進めていくものとして認識されている。

職員全員が何らかの形で安全衛生活動を体験する

安全衛生活動の基本ともいえる「職場巡視」についても、呉市の手法は少し変わっている。呉市事業場安全衛生委員会は、本庁は年2回、支所は年1回のペースで全体の職場巡視を行っているのだが、その際、まず各職場で「事前チェック」をしてもらい、その報告を受けて委員会が巡視するというやり方をとっているの

である。

「事前チェック」では、各課に配付されたチェック項目に従い、所属の職員が自分たちの職場を自己点検する。それを報告書（図4）に記載し、委員会に提出。委員会は、その報告書を基に巡視のポイントを絞って巡視するのだ。榎谷さんは「私たちは一方的に報告しっぱなしでもなく受けっぱなしでもない、互いにレスポンスすることが大切だと考えています。委員会が報告書をよく読み、巡視の際に良いところは評価し悪いところはどうすれば良くなるのかを指摘するからこそ、各職場も自己点検に積極的に取り組んでくれるのでしよう」と言う。職場巡視もまた、

一般の職員にとって「受ける」ものではなく、共に参加して「行動する」ものだとして認識されている。

もう一つ、本庁の職員全員が参加している安全衛生活動がある。21年度から始めた「あいさつ運動」だ。これは毎週月曜日の朝と、水曜日の一斉定時退庁時に、職員がアナウンサーとなって庁内放送であいさつをするというもので、アナウンサーは月ごとに担当する部局が指定され、その中で選ばれる。年齢も立場も特に制限はない。保健師の須山美保子さんは「あいさつ運動はメンタルヘルス対策の一環として安全衛生会議で実施を決めました。特に何を話しなさいという指定はないので、健康に関することや日ごろから心がけていることなど、みなさんいろいろなことを話しています。メンタルヘルス対策といっても、趣旨は『元気で気持ちよく仕事をしましょう』ということなので、気軽にやってくれます」と言い、榎谷さんも「始めるときは『マイクの前に立って生放送で話すなんて嫌がるかな』と心配していましたが、意外に楽しんでいくようです」と笑う。

「職員みんな安全衛生への意識が高く、何をやるにしても協力的で助かっています。職員組合が熱心にバックアップしてくれるのも、安全衛生生活動がうまくいく秘訣の一つです」と言う榎谷さん。青木さんも「一般職

員も含めてみんなで活動をしているので、全体的に盛り上がるのだと思います」と笑顔だ。このように呉市の安全衛生活動が徐々に活発化してきたのは、職員一人ひとりが、こうした日常の安全衛生活動の経験を通じて、安全衛生活動とは一部の安全衛生委員だけがやるものではなく、当たり前のように全員が参加するものだと考えるようになってきているからなのだろう。

人事異動のおかげで職場ごとの温度差がなくなる

呉市には、特別に安全衛生活動に詳しい職員や専門家がいないわけではない。他の地方公共団体と同じように異動も定期的に行われる。それらは安全衛生活動に支障をきたすことはないのだろうか。

青木さんは「確かに特別安全衛生に詳しい人や専門家がいませんので、もしかすると、今の呉市の活動では行き届かない点もあるのかもしれませんが。でも、全員が知恵を絞って活動することで、必ず押さえておかなければならない部分についてはできているのではないかと思っています」と語る。一方、職員の異動についても、榎谷さんが「安全衛生委員だけが活動しているのではなく、全員で取り組んでいるので、誰かが異動してしまっただけでなくなると

ということはありません」と語る。確かに、呉市の安全衛生活動の詳細を聞いていると、一般職員の参加が非常に多いので、そのとおりであろうとわずける。さらに青木さんは、異動にはよい効果もあるのだと教えてくれた。「呉市の安全衛生活動は、現業職だけが活発だったり、どこかにまったくやらない職場があったりというようなことがなく、平均的にみな同じレベルで活動してくれています。それはきつと、職員が異動して、その異動した先でも前の職場と同じように活動しようとするからでしょう。職場によって温度差がないのは、異動の利点だと思います」

* * *

安全衛生の人材育成というところ、ついで、「研修制度」や「安全衛生教育」、そして「いかに専門家を育成するか」などを考えてしまいがちだ。しかし、呉市に行って実際の現場の声を聞いてみると、それにはどれも当てはまらずに驚いた。職員全員の安全衛生の意識を高めることは決して容易ではないし時間がかかることではあるが、それが不可能ではないことを呉市が教えてくれた。全員参加の安全衛生活動を続けること。それは瞬間的に問題を解決できる「特效薬」ではないが、継続することで確実に効果が出てくる人材育成の手法なのではないだろうか。